

路地裏と靴音



～モノを通してつながるステキ～



vol.1



作家が紡ぐ。

「靴」

シーズンテーマはどのように決まるのか？

新作はどのような工程で生まれるのか？

革自体に対するこだわりが強くなっているのはなぜ？

今後のkokochisun³の目指す方向性とは？



作家とモノのつながり
〜プロローグに代えて〜

靴作家・森田圭一

高校卒業後、働き先の靴のセレクトショップでイギリスからやって来たハンドメイド・シューズに衝撃を受ける。4年間在籍した店を辞め、靴製造の仕事に携わること8年。作れば作る程に靴への探求心は増し続け、2006年、31歳にして西成製靴塾の門を叩く。翌年、神戸市須磨区にて「こうべくつ家」開設。ハンドメイドにこだわった「kokochi sun」ブランドを展開。2010年からは自社工房2階にセレクトショップもオープンし、直営ショップとして運営中。



Keiichi Morita

潮の香りと波の音。そしてビーチでこだまする無数の笑い声。2013年、真夏の神戸市・須磨海岸。この人の思いつきはいつも突然だ。でもその突然はいつも、楽しげでワクワクする「何か」を感じさせる。まだ形のはっきりしないその「何か」に誘われるままに、今日ここに来てきて、この人に連れられて歩いている。

須磨海岸からほど近く、路地裏のそのまた路地裏。子どもだった頃にタイムスリップしたかのような感覚。郷愁。風景に溶け込むほど自然で、心地よいくらいに懐かしくて、一人でいたらその横を素通りしていたかもしれない改装された古い一軒家、もとい靴工房「こうべくつ家」のドアを、靴作家・森田圭一がゆっくりと開いた。

シーズンテーマはどのように決まるのか？

2013年秋冬シーズン、当初のイメージは「バーチャル」？

(インタレスト、以下「I」)では、早速始めましょう。今日はよろしくお願ひします。今回のインタビューでは、対象としては今秋冬シーズンの新作に的を絞りながらも、話題として

は素朴に「私たちが知りたいこと」を、森田さんになるべく大きな視点で、それでいてなるべく具体的に語ってもらおうと考えています。ここでいう「私たち」というのは、「お客様」を想定しています。

(森田、以下「M」)はい、わかりました。よろしくお願ひします。

I 最初はシーズン毎に設定されるテーマについてです。2013年の秋冬はシーズンテーマが「On the Road」サブテーマが、「靴底をすりへらせ、人生を積み上げろ、RUN、RUN、RUN!」。そもそも、シーズンテーマはいつ頃から考え始めるんですか？

M それはもう、新作ができあがった頃です。たとえば、次の春夏の新作のテーマについてはちょうど今頃、今秋冬の新作のサンプルがすべてあがった頃から意識し始めます。

I 興味深いですね。具体的に、今秋冬のシーズンテーマがどんな風に固まっていたのか、教えてもらえますか？

M ある程度イメージが固まったのはゴールデンウィークの頃です。でも、そのときはまったく違うテーマだったんですよ。笑

I まったく違うテーマ? どういうことですか? M 当初のテーマは、「言でいうと」「バーチャル」。「空想世界」とか「仮想世界」とか、そういうイメージでした。いずれつくるフライヤー(IIチ

ラシ)では、黒板の前に二人の人が立っていて、その人の脳みそから木の枝みたいなのがブワワって全体に広がるような感じを想像していました。

I うわ、まったく違う...どころか、「On the Road」の地に足の着いたリアリティとは180度違うじゃないですか(笑)。でもそこから先がすごく気になる。続けて下さい。

たどり着いた等身大のリアリティ、「On the Road」

M それで、イメージを膨らませるために映画を観たり本を読んだりしたんです。数は覚えていないんですけど、ファンタジーからノンフィクションのドキュメンタリーまで、あえてジャンルを問わず結構観ました。

I はい。 M そのなかで、「スケアクロウ」っていうロードムービーがあったんです。(注:1973年公開、ジェリー・シャッツバーグ監督のアメリカ映画。カンヌ映画祭で最高賞のパルムドールを受賞)「スケアクロウ」は日本語で「案山子(かし)」って意味なんですけど、この映画に出ている不器用な人間、だらしなない人間っていうのが、僕大好きなんですよ。「ああ、好きだなーこいつら」って、改めて思ったんです。

I 人間の人間くさい部分が好き。森田さんはいつもそう言いますね。

M それで最初の「バーチャル」が吹っ飛んじゃった(笑)。そして自然な流れで、昔読んだ「On the Road」っていう小説を思い出したんです。(注:1951年、ジャック・ケルアック著の自伝的放浪記。当時隆盛を誇ったヒッピーのムーブメントに大きな影響を与えたといわれる)これを読み返してみた。

I なるほど、それでたどり着くわけですね。

M そう。昔この小説を読んだときは、後先や損得を考えずにハチャメチャやってる主人公に共感して、極端な話、「俺も何かアクションをとれば世界が変わる」って本気で思ったんです。でも38歳になった自分が読み返してみると、全然感想が違ってますよ。

I フライヤーに書いてあるように。

M そう。「無理なものは無理」とか、「始める前に考えようよ」とか。で、なんとというか、それがとつとも気持ち良くないんです。笑

I 気持ち良くない。複雑な気持ちになる。

M そう、複雑。それは「成長した」っていうことなんだから納得したいんだけど、どうも気持ち良くない。登場人物たちにヤキモチを焼いている自分がいて。

I それで、新作の名前が「T r a m p」なんですな。

M そうです。「T r a m p」は「放浪者」です。

「On the Road」に出てくるヤンチャで不器用な人たちへ、僕自身の嫉妬心も含めてオマージュを捧げたつもりです。

「一応の確認なんですけど、「バーチャル」はもう今秋冬については出てこないですよ〜ね?笑

M「切出てこないです。笑」

「こういうデザイナー・作家のインスピレーションだとか、思考プロセスだとかは、私たちがらほうかがい知れない部分が大きくて、こういう具体的な話を聞けるのはすごくおもしろいです。ありがとうございます。」

新作の名前は「Trump(=放浪者)」。ソールに詰め込まれた「RUN、RUN、RUN!」

Iでも、今回はもう少し掘り下げたいんです。そうして「On the Road」で固まったシーズンテーマですが、この時点ではまだ「イメージ」ですよ。その「イメージ」という抽象的な概念が、どのように靴という具体的な物体に落とし込まれているのか、という点が気になります。

Mなるほど。ええと、まずはソール(=靴底)です。「放浪者たち」へのオマージュですから、ソールは無骨に思いました。実際にできあがった新作は、この通りトリプルソールですからね。(注:土踏まずより前のソール部分の革が三重

Mそう、ところができあがった靴は、男性が履けばもちろん無骨さがしっかり出るんだけど、女性が履くとなんだかかわいい。これは僕としても嬉しい誤算で。

Iそうなんですよ。女性が履くと本当にかわいい。そして男性が履くと、もちろん文句なくカッコイイ。でもこのあたりのバランスはいつもうすこいなあと思っています。



になっている。見た目も実際もとてもタフなつくり」

Iあ、本当だ!すごい!つくるの大変そう。笑



Mもう泣きながらやっていますよ(笑)。あとはかかとです。サブテーマで「人生を積み上げろ」と言っているんですが、良いことや悪いこと、とにかくいろいろな出来事が、それぞれ「人生」となつて積み上がっていくような。

新作はどのような工程で生まれるのか?

まずは丸ごと一足、作家自身が作り上げる

Iここまで、どのようにシーズンテーマが生まれるのか、そしてそのシーズンテーマが靴にどのように落とし込まれるのかを、具体的に話してもらいました。続けて、これもできれば具体的に、工房でどのような作業工程で新しい靴が生まれているのかということについて聞きたいと思います。

Mなるほど。

Iその前に、さっき下の工房で職人さんたちが黙々と靴作りをしているのを見ました。森田さんの工房では、それぞれの職人さんたちに決まった役割、たとえば「この人はソール担当」「みたいなものはないんですかね?」

Mはい、ありません。彼ら二人ひとりが丸ごと一足つくることができます。

Iそれってこの工房の二つの特色といつてもいいですよ。特に海外だと、それぞれ職人の技量によって、相應の難易度のプロセスが割り当てられているイメージがあります。

Mそうですね、うちではそういう分担はありません。

Iでも、「MUKU」や「たいこのおと」のよう

「いつもの靴より分かりやすくというか、良い意味で大きさに積み上がっていますよね。」

Mそれとかかとの「形」です。馬の蹄鉄(ていつ)の形状に加工しています。「RUN、RUN、RUN!」、人生を駆け抜けるってイメージを反映させました。

I馬のように疾走しようよと。

男性が履くとカッコイイ、女性が履くとかわいい

M二方で、アップパー(=靴の上面)にはほとんど迷いがありませんでした。

Iという?」

M普段僕は「今までにないものを作ろう」という想いが強いんですが、今回はそもそもテーマがリアルだし、年代的にも60〜70年代のアメリカのヴィンテージスニーカーみたいな、ある意味での潔さやシンプルさを出したいと考えていたので。

Iそうか、あれこれ考える必要がなかったんですね。

Mそうですね。そういうイメージを持って実際の制作に取りかかったわけです。正直に言って、これは結構男っぽい靴になっちゃうかな、でも今回はそれでいいやって気持ちがありました。

Iそれは私も思いました。テーマや新作の画像だけ見ていると、ずいぶん男性的な靴だなと。

な定番靴ならそれもわかりますが、新作ではそうもいきません。新作はまずは森田さんの頭の中で誕生するわけですよな?」

Mはい、そうですね。

Iまさかその状態で他の職人さんたちがその靴をつくれるはずもないですよな。

Mそれは無理ですよ(笑)。新作については、もちろんまずは丸ごと僕一人で作ります。

ファーストサンプルからセカンドサンプル: : :そして「グレーディング」

Iすべてのプロセスを、まずは森田さん自身が担当する。

Mはい、しかも最初の一足でイメージ通りになることはまずありません。

Iというのは?

M具体的に話をしましょうか。まずは木型を選びますよね。そのあと実際に靴をつくりながらパターン(=型紙)をひくわけですけど、もうこれは何度も何度も修正しながらの作業になります。おもしろいものを見せましょうか。まずはこれを見てみて下さい(5頁画像左)。

Iはい。このヌメ革の「Trump(=放浪者)」。M実はこれが、新作のファーストサンプルなんです。

Iへえ!これはお目にかかれない代物ですね。

Mでもこれ、完成品とはまったく違うんですよ。



どことが違うか分かります？

—うーん、これだけ見ても分からないですね。

Mじゃあこれと見比べてみて下さい(写真右)。

—これは？

Mこれがセカンドサンプル。これも僕がつくりました。ファーストにまったく納得がいかなかったので。

—なるほど。ええと、見比べてみると、まずはやっぱりソールの厚さが違いますね。それだけ、この靴が持つていなきゃいけない「無骨さ」が、セカンドの方が大きい気がする。

Mそれが一つですね。あとは裏を見てみるとよく分かりますよ。左がファースト、右がセカンドです。



—え、これ同じサイズですか？

Mそうですね。同じサイズです。

—これは想像以上に違いますね。セカンドの方がファーストより二回りくらい大きく見える。

Mこうして前の部分を大きくすると、かかとのバランスが悪くなるんです。

—かかとのバランス？

M大きくなった前に比べて、かかとのポリウレムが小さすぎるんです。違い分かります？左がファースト、右がセカンド。

—あ、かかたがアップパーからはみ出していますね。Mそう、このはみ出している5mmが重要なんです。

す。裏側から見てもほら。



—うわ、本当だ。全然違う！セカンドの方がはるかにポリウレムが大きい！

Mでしょう？ファーストだと、自分が思い描いていたイメージよりずっと「線が細い」んです。もっと力強さが欲しかった。

—なるほど。じゃあこのセカンドが事実上の完成品ですか？

M僕の手によるものという意味ではそうです。この靴でパターンを引いたのがこれ(次頁写真左)です。

—これを職人さんたちがつくるわけですね？

Mそうですね。まずは僕がどういう順番で作ったかとか、注意点とかを説明して、そのあとは職人全員で「段取り」を話し合います。話し合うといっても、実際に作りながら、工程そのものや靴のディテールのプラスとマイナスを繰り返していくこととなります。

—その「段取り」というのは？

M僕が作ったプロセスや順番が、必ずしも効率的じゃない場合が結構あるんです。実際にお客さんからオーダーを頂いて作るとき、戦力になつてくれる彼らが作りやすいように段取りを考えてもらった方がいいんです。

—なるほど。

Mそうやって、ああでもない、こうでもない、皆で知恵を出し合いながら、サイズや革を変えてメンズとレディースでいろいろなサイズの靴を作っていきます。いつも受注販売会のように並んでいる靴はそうやってできあがった靴なんです。その過程で、職人全員が、その靴を足まるまる作れるようになっていくという感じですよ。

—たとえば今回の新作で、職人全員によるサンプル制作の段階で変わった箇所とかがありますか？

Mありますよ。たとえばソールの部分。両方とも僕が作ったんですが、左側がさっき見せたセカンドサンプルで、右側が完成品です。どことが違うか分かりますか？



※出来上がったパターンをグレーディングにかけ、それぞれのサイズにあったパターンを作成する。

—これ、森田さんがつくったんですか？

Mそうですね。僕のことなんだと思ってるんですか。笑

—いやいや(笑)、もったいなく、身振り手振りでやっているのかと。

Mそんなわけないじゃないですか(笑)。それで、これを「グレーディング」にかけます。

—「グレーディング」？

M要するに、パターンのサイズ展開です。僕がつくったのは26.0cmなので、それを22.5cm〜27.0cmくら

いまで、0.5cm刻みでつくらなきゃいけない。

—自分たちでやるんですか？

Mいやいや、日が暮れちゃいます。日が暮れるだけじゃすまないか(笑)。業者に投げるんです。この作業はとも数学的なので、専用のコンピュータを持つている業者にやつてもらってます。

—へえ、パターンって外注なんですか。

M考えてもみて下さい。たとえば、26.0cmを22.0cmにするとき、仮に縦を4.0cm短くしたとして、横も4.0cm小さくなると思います？

—いや、それはありませんね。縦が22.0cmの足の人の横幅が5cmとか4cmだということになつてしまう。・・・そうか、この立体的な作業を人間の頭だけでやるとたいへんなことになるんですね。言われてみるとわかるけど、言われな

いと気づかないです。

Mでも確かに、こちらからすると常識でも、お客さんからすると全然そうじゃないですもんね。それで、二例ですが、これがあがつてきた22.5cm(写真右)のパターンです。

新作のサンプル(＝完成品)作りは職人全員で、知恵を出し合って作られる

—おもしろい。初めて見ました。

Mこれでいよいよサンプル作りに入ります。サンプルといっても次に作るのは完成品で、お客様に買って頂けるものです。



判明したkokochi sun³の「履き心地の良さ」の理由？

I なるほど、全然雰囲気違いますね。あと、そうそう。忘れてはいけないのが履き心地の良さです。この靴、もともとある木型を使っているんですよ？

M そうです。「オルガスタ」とか「HINOWA」と結構です。

I いやあ、こうして実物に足を入れてみるとビックリします。本当に履き心地がいい。いつも以上にフィットングが良くて、だからこその重さを感じない。見た目の重量感とのギャップがすごい。感激しました。もちろん理由はあるんですよ？

M はい、あります。一番はライナー（内側の革）のクッション性ですね。いつもは切りっぱなしの履き口の靴が多いんですが、今回はライナーとアッパーを袋状に縫い合わせています。

I あ、本当だ。そうか、これはフィットングが良くなるわけですね。

M この靴は、テーマ上かなりたくましい姿にならざるを得ませんし、トリプルソールとか実際の製法もかなり重々しいので、フィットングの良さはいつも以上に意識しました。でもね、そうそう、その「履き心地」についてはちょっと別の話があるんですよ。

I なんですか？

M ちょっと脱線しちゃうけどいいですか？

I もちろんです。聞かせて下さい。

M インタレストさんもそうだけど、よくうちの靴の履き心地の良さを褒めてくれるじゃないですか。でも僕ね、ええと、どういったら誤解がないかな。一言でいうなら、「履き心地が良い靴を作ろう」という意識はないんです。

I 要するに、「履き心地が最重要ポイントではない」、「テーマやデザインより履き心地を優先させるといっていいわけではない」ということですね？

M そうそう。でも実際は、今回の新作もそうですけれど、うちの靴は全般、履き心地について褒めてもらえることが多い。その理由の一つが、最近判明したんですよ。笑

I おお、聞きたい聞きたい。

M いや、変な話なんですけど、僕ら百貨店さんで販売会やらせてもらうんですよ。この間、某百貨店さんで、初めて靴売り場でスペースをもらったんです。いつもはイベントスペースがメインで。

I 婦人靴売り場ですね？

M そうです。それで、あるとき周りを見てみると二人のお客さんが棚の上に置いてある靴を、そのまま足もとにストーンと落として、座りもせず、靴べらも使わず、立っただけで履いて、そのままスタスタ歩くんですよ。

I はあ。

M それで、「じゃあこれちょうだい」って。ああ、

たちを見ると、もう一つ聞きたいことが出てきます。

M はい、なんででしょう？

I 今回の新作で使われている革が、これまで見たことのない革ばかりなんです。

M あ、そうですね。この秋冬から新しく選んで頂けるようになった革をメインに使っています。

そういうことかと。普段こういう靴の選び方をしているなら、そりゃうちの靴を履いたときに、履き心地が良いって驚いてくれるだろうなって。笑

I なるほど、なんと分かりやすい話。笑

M うちのお店ではね、「まずは履いて下さい」、「そしてそのまま僕と5分間立ち話をしましょう」、「5分後に」それで履き心地はどうですか？どこか当たってきませんか？」って、こういう流れで靴を選んでもらうんです。正しい選び方・買い方をするだけでも、履き心地はかなりよくなるはずですよ。

I それいいですね。すごく良く分かってもらえますもんね。うちでもぜひやろう。

M 木型によっては合う合わないもあると思いますから、ゆっくり選んでもらえたらって思いますね。

I いや、でもそれは少し謙遜もある気がしますが、本当、今回の新作は特にすごいんですけど、他の靴についても森田さんの靴は本当に履き心地が良いと思いますよ。うちのお客さんも、最初はぱっと見もの珍しげに眺めているんですけど、実際に買って下さる方は、ほぼ例外なくご試着下さってその履き心地の良さを体感して頂けた方なんです。

M なるほど。

I 特に女性のお客様がそう。それで、一度それを履き始めると、他の靴が履けなくなっちゃう。

革自体に対するこだわりが強くなっているのはなぜ？

革の染色を自分たちでやり始めた

I さて、話を元に戻しましょう。今回のようにインスピレーションの源であったり、それをどう靴に落とし込んでいるのかであったり、あるいは実際に「新作靴をつくる」という作業がどのようなものであるかだったり、こういう具体的なプロセスを聞いたのは、個人的に初めての体験です。

M どうですか？笑

I いや、ものすごくおもしろいです。ワクワクしますし、靴に対する目線も変わってきます。まるで生き物の誕生の瞬間を見ているかのよう。「ハンドメイド」の醍醐味の一端に触られた気持ちです。

M それは良かったです。ありがとうございます。

I それでこうして改めて、できあがった新作





「聞きたいことというのは、靴をつくる前段階、「革自体」に対する森田さんの興味が、最近モリモリ盛り上がりつつあるのではないかと。」

M ああ、それはその通りです。笑

「昨年の夏頃から、森田さんの工房で、「革自体をつくる」ということをやり出していますよね。もちろん今は染色段階からということなの

「限界？何の限界ですか？」

M 「表現の限界」です。

「はあ、なるほどなるほど。」

M 既成の革というのは、大きな工場で、単にムラなく染め上げられます。それだからこそ、製品として販売するに値するわけですが、それはそれとして、僕らとしては「もう少しムラっぽい染めの方がいいんだけどなあ」と思うことが良くあったんです。でも当然ながら、そういう革は工場にとっては失敗作なので、売り物にはならない。

「そうですね。一部それを「味」として楽しんでくれる人がいても、その「一部」向けに大きなロットで製品化するわけにもいかない。」

M はい。ここまで話したように、僕ら作家が「こういう靴を作りたい」ってかなり具体的なイメージをしたとき、当然「こんな革を使いたい」というのも考えるんです。でも必死に探しても、既製品ではまず見つからない。じゃあもう作っちゃったらいんじゃないかと。笑

「その後いろいろ試行錯誤があり、それが結果したのが、今春夏の「Fiesta」と「Marco」ですね。」

M そうです。あれは全部、うちの工房で染めた革を使っています。染め方は色によってすべて違います。そしてそれらに対して、お客さんに共感してもらったという感覚を持てたのが自信につながりました。



※ムラのついた染めを施した「Fiesta」



※デッドストックレザーで作られたザンパノ



※仕様から約3か月。焼け色がついてきた、デッドストックレザーを使用して作られたサーカス。森田私物。

でしょうが。

M そうですね。

「それまではタンニング(注:そのままでは硬化して使えなくなる「皮」を、化学変化によってやわらかくして「革」にする工程)と染色が済んだ、革としてのいわば「完成品」を仕入れて、それで靴をつくっていた。でも今では、タンニングが済んだ革を仕入れて、それを自分たちで染めるということをやっています。」

M ちょうどさっき、外でやってもらっていましたね。あれは、今春夏の新作として出した「Fiesta」、「Marco」で使っている革のブランドです。

「革自体」へのこだわりは、作家として表現の自由を確保するため

「そもそも、こんな風に「革自体をいじりたい」と思ったきっかけは何だったんですか？」

M それは昨年、「海外限定染め」ということで、初めて革のムラ染めを自分たちでやったことですね。

「「ビート」、「銀河」、「さくら」、「もみじ」の4種類ですね。ちなみに、この画像が「銀河」でつくったサーカス。(この4種類の革は現在では生産停止中)」

M そうです。ちょうどその頃、既成の革では限界があるなど感じていたんです。

タンナーと協力して、新しい革を生み出す試み

「そういうえば、さっきタンニングが済んだ革を染めると限定してしまいましたが、染色の上流、まさにそのタンニングから手を付けて作った革がありましたね。前回の受注会で大いに話題になった数十年前のデッドストックレザー(注:昔の革でしかも新品の状態で保管されているもの)、あの復刻版を作ったと聞きました。」

M はい、そうですね。デッドストックレザーですから、当然ある分で終了です。でもその風合いがあまりに素晴らしかったので、そのデッドストックレザーを保管していたタンナーさんと組んで、その再現を目指して新しい革を作りました。」

「ちなみに、うちのお店では、受注会の会期中にそのデッドストックレザーを使った「ザンパノ」をオーダー頂きました。とんでもなくカッコイイ仕上がりでした。」

M あれは作って興奮しました。笑

「あ、そういうえば、さっき森田さんが履いていた「サーカス」もそうですね。これはまた、たまらない表情に育っていますね。」

M これですね。だいたい焼けてきましたよ。多分、お客さんのザンパノも今頃このくらいの色にはなってるんじゃないかな？」

「これを「ある分で終わりです」とはしたくなかったと。」

M そうですね。あちこち回っていてもすごく評判が良かったので、この革を作ろうとすぐに思いました。

靴がもってて欲しい「くたびれた感」を出す加工もできるように

I それで、その復刻版の革「インディ」でつくった、今回の「Tramp・hi」がこれですね。

M そうです。めっちゃ良い感じでしょう？

I これ、左と右同じ革ですか？



※「Tramp Hi」左が加工後、右が加工前

今後のkokochi sunの目指す方向性とは？

「日本の革産業の一翼を担えるハンドメイド靴工房を目指す」

I ここまでありがたいとうございました。なるべくお客様が何を知らたいかっていう視点で質問させてもらったつもりです。

M 確かに、「グレーディング」とか、普段話しませんもん。笑

I そうですよ。でも知れて良かったです。それで最後に、これは今後のインタビューでもさんざん出てくることでしょうかから、今回はざっくりとお聞きできればよ。

M はい、なんででしょう？

I 「今後のkokochi sunの展望」ですね。展望というか目標というか。

M そうですね、これはいつも言っていることなんですけど、「日本の革産業の一翼を担えるハンドメイド靴工房を目指す」ってことです。

I 改めて、具体的に説明をお願いします。

M はい。たとえば、今の僕らの規模だと、タンナーさんに革を発注するにしても、少量お願いすることしかできない。これって、実はタンナーさんにとっては非効率なんです。

I 大きな工場の場合、ある程度まとまったロットで革を作った方が効率的ですからね。

M いいところに目をつけてくれました(笑)。そうですね、同じ革です。実は右が無加工の新品状態で、左側は「二日間」入っています。

I 二日間？

M いや、実際には二日間も三日間も入っているんですが(笑)。要するに、加工してるんです。相当履き込んだ風合い、「くたびれた感」を目指して、今回の「Tramp」って靴のイメージはまさにこれなんです。あのデッドストックレザーに近いのもこっちですね。

I この革については、お客さんにどちらが良いか選んでもらえるようにしたいと思っています。

I え？この履き込まれた風合いの方でお渡しすることもできるんですか？

M はい、そうしようと思っています。結構な手間がかかるので、価格は上がってしまいますが無加工の方が良いという方も当然いらっしゃると思うので、それはそれでももちろんOKです。

I なるほど。でも確かに、今日聞いている話の雰囲気が一番体现しているのは、この加工の入った「Tramp・hi」のような気がする。

M でしょう？

既成の革でも、より雰囲気の良いものを使えるように

I こんな風に、今の森田さんは靴に対してはもちろん、その革自体をいじる快感に目覚め

M その通りです。下手をすると、今の僕らはむしろ、タンナーさんを苦しめている可能性すらあると思うんです。注文は受けたけど赤字だった、みたいな。これじゃ全然ダメだなと。

I 大きなロットでビバシオーダーを入れて、森田さんの工房だけでもタンナーさんの仕事が回るような。それが、「日本の革産業の一翼を担う」という意味ですね？

M そうです。これ話すたびに大風呂敷を広げるみたいでヒヤヒヤするんですけど。笑

I 森田さんの工房で使われている革は、ほとんど姫路産ですか？(注：兵庫県姫路市は日本でも有数の革の産地)

M 工房から近いこともあって、8、9割がそうですね。

I 全国でも名高い姫路産の革が手に入りやすいという地域的な利点は、得がたいものがあると思いますね。

M それは本当にそうですね。すぐに行けるので細かい打ち合わせもしやすいですし、結構無理も聞いてもらっています。

I そしてその革のほとんどがベジタブルタンニンなめしですか？(注：前述の「皮」を「革」にする加工の際、クロムなどの化学薬品などを一切使わず、植物由来のタンニンのみを使う技術。クロムなめしとは比較にならないほど時間・手間・金がかかる。)

M そうです。やっぱりベジタンの方が革に表情

てしまったわけですね。笑

M そうですね。ただ、僕らがつくったり染めたりしている革以外、つまり既製の革でも、かなり良い雰囲気のものを見つけたので、それも今秋冬シーズンから使えるようにしています。

I 確かにすごく良い雰囲気。私は個人的に馬革が好きすぎるので(笑)、「ホースシユリンク」なんてたまりません。これらについては、店頭やブログで詳しくご紹介しようと思います。

M あと、レザーソールは新しく16色用意しました。

I え？ソールの色を16色から選べるってことですか？

M はい。笑

I それはすごいですね。お客さんもますます迷ってしまいそう。これも工房で染めているものがメインですよ？

M そうです。

I 今後、こういう「革づくり」のようなプロセスに深く関わっていきたいという気持ちですか？

M そうですね。何かテーマがあって、それを実現するために革をつくるということでもいいですし、なんだかおもしろい革ができあがったぞっていうところから、新しいテーマが生まれてもいい。そういう自由の幅がだいぶ広がってきたように感じています。

があつて、さっきの話じゃないですけど、「表現の自由」が格段に大きいんです。

I そうですよ。ね。経年変化も楽しいですし。

M はい。だから、普段お世話になつてる姫路のタンナーさんたちに恩返しができるようにならないと、いつも考えています。

I 私たちも東京で、もっとたくさんの方々にkokochi sunを履いて頂けるよう、一緒に頑張ります。

M ありがとうございます。期待しています。笑



vol.1 2013年9月発行

企画 こうべくつ家
kutsuya-koubou.com

デザイン 森田 守
moritambo.com

写真 平川 圭太、他

文 インタレスト
interest-kagurazaka.jp

本紙掲載の、内容、写真、イラストなどの
無断転載をお断りします。

編集後記

こんにちは。東京・神楽坂で「インタレスト」という洋服屋をやっている「店長D」です。
kokochi sun3の靴作家・森田圭一さんへのインタビュー、お楽しみ頂けましたか？
これは、「2013年秋冬の新作をインタビュー形式で紹介してみたい」
「そのインタビュアーとライターを(私・インタレスト店長Dに)お願いしたい」という
森田さんのまさに「突然」のアイデア・提案が実際に形になったものです。

タイトルにある「モノを通してつながるステキ」という部分は、インタビュー後に森田さん自身が
考案したものです。普段接している私が思うに、森田圭一という靴作家は、自分たちがつくる
靴を中心とした「モノ」を通して、人と人、人と社会、社会と社会・・・
その他いろいろなものが楽しげにつながっていく、連なっていくということが本当に大好きで
そのことを大きなモチベーションにしてモノ作りに取り組んでいる人だと思います。
いつだったか、森田さんが「自分たちのつくっているモノは『架け橋』みたいなものだ」
と言っていたことが思い出されます。

そして今、今回の企画を「これきりでおしまい」とはせずに、実際にモノが架け橋となってつなげていく
連ねていくたくさんの「ステキ」たちを追いかけていって、それを不定期で紹介する
継続企画にしていければと、森田さんと話しているところです。

そうそう、以前森田さんが嬉しそうに話していた「ステキ」を、ここで一つ。

kokochi sun3を代表する靴の一つである「kaza-ana」を愛用している、互いに見ず知らずの二人の方が
あるとき路上で偶然鉢合わせし、その場ですかさずハイタッチをしたそうです(笑)。

「kaza-ana」をご存じでしょうか？一目見れば絶対に忘れない、

他では決して見ることのないデザインで、この靴を好きな方は例外なく心の底から本当に大好きなので
「語らずともわかり合う」という強烈なシンパシーが生じたのでしょうか。思わず笑みがこぼれてしまう

「ステキ」、ですね。いずれにせよ、そのような方向性での継続企画にしていこうという話は、
あとになって固まっていたわけですが、その「第1回」となった今回のインタビューは期せずして、
この企画全体の「プロローグ」としての位置づけとなりました。それは、「モノを通してつながるステキ」について
語られる前に、そもそもの「架け橋」たる「モノ自体」について語られる機会になったからです。

このインタビューをお読み頂いて、「作家のどのような想いが込められて、そしてどのようなプロセスでもって
モノが生み出されているのか」(＝「作家とモノのつながり」)について、皆様のご理解が深まりましたなら、
まずは一つ目標達成です。そしてもう一步、今秋冬の新作に限らず、すべての靴たちがこのようにたっぶりの
愛情と手間暇をかけてつくられていることを知って頂き、それらの魅力を再確認して頂けましたなら
この上なく嬉しく思います。今後その「モノ」で、いつ、だれが、どこで、どのようにつながっていくのか。
森田さんも私も、そして履いて頂くお客様ご自身も想像しないような
無数の「ステキ」が生まれていってくれればと願っています。

最後に、本企画につきまして、ぜひ皆様のご感想とご意見を頂けましたら幸いです。

せっかくお客様といつもお話している私がインタビュアー・ライターをつとめるわけですから
今後もお客様が知りたいことやお客様の想いを、森田さんにつづけていきたいと考えています。
皆様と一緒に、2回、3回と回数を重ねていければと思います。ご協力、どうぞよろしく願いいたします。

2013年8月